

「縮図」

東京都 女子学院高等学校 3年  
菊地 愛佳

中央の重い扉が開き  
響き渡る 革靴の固い音  
起立、礼——。  
四方からのお辞儀に  
私は両足をきつく踏み締める

箱舟に閉じ込められた私たちは  
有機体の集合のよう  
目の前の柵がかろうじて  
二つの世界を隔てている

縄を解かれたその人は  
糸で吊られた人形のごとく  
そろそろと証言台へ進み出る  
目を伏せて俯きがちに  
その背中はやけに小さく見える

「どこでナイフを買ったのですか」  
「この時手を掴んだはずだ」  
「いや財布は取っていません」  
言葉は渦を巻いて  
人間の過去を定義し続ける  
言葉は光と闇を織り交ぜて  
数多の感情を浮かび上がらせる

ここは法廷——。  
一人ひとりの人生の巻き戻しテープが  
今 ゆっくりと回り始めた

彼だけが愚かなのだろうか  
箱舟は言葉の波に洗われて

時に思わぬ方向へ舵を切り出す  
だが 私に拒むことはできない  
正義を語る声の中の小さな沈黙が  
真実を映す水脈となりて  
箱舟を終着地へと導いてゆく

私たちは社会という名の箱舟に乗り  
過去を携え 生きてゆく  
私は駆け抜けてきた青春を  
「あの頃に戻りたい」と  
いつか渴望するのだろうか  
それとも  
「温室の中の自由だった」と  
自嘲する日が来るのだろうか

ここに変わりたいと願う人がいる  
たまたま箱舟に乗り合わせた他者の言葉は  
その過去に文字を刻み  
その未来に色を塗る  
しかし 変わらなくてもまた人は生きてゆく

起立、礼——。  
審理の終わりが告げられる  
裁判所を出ると  
私の身体の真ん中を  
すーっと風が通り抜けた